

ホノルルにおける日本人の白人家庭労働

——『日布時事』の記事などにみる——

飯田耕二郎

I はじめに

太平洋戦争前のハワイ、とくにホノルルにおいて日本人による家内労働、いわゆる奉公人は独立就業者のなかで最も多かった。しかしながら、あまり目立たない職種のためか、それに関してはカナダのバンクーバーを対象とした最近の報告¹⁾があるものの、ハワイについての本格的な研究はこれまで見当たらないように思われる。本稿では白人家庭労働をキーワードとして、官約移民初期から太平洋戦争後までの期間、その職種の内容、居住地域との関係、時代による傾向や問題点などについて明らかにする。そのために、ハワイの代表的な日本語新聞『日布時事』にみられる求人広告や特集記事などを活用する。

1885年から始まった官約移民のなかにも、すでに家庭労働に従事した者がいた。『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』（1935年）では、第1回および第2回渡航の現存者（当時第1回33名、第2回29名）についての記事に該当者が数人みられる。第1回船の中村馬太郎については、ハワイ島クワイハイレで3年間の契約労働の後、「ホノルルへ出府してからは1週間2弗50仙でヤードボーイをしたりコックをしたりしたが、思わしくないので加哇島のカウアイ島のアナアナ耕地へ行き、18弗の月給で働き²⁾（以下略）」とある。第2回船では宮本誠諦、倉田敬一、野村長四郎、岩崎初太郎と佐伯熊蔵の5名がいずれも白人家庭で働き、うち岩崎以外の4名はコックに従事したことが知れる³⁾。

ハワイでは初期から、家庭労働者は奉公人と呼ばれていたようである。『日布時事』の前身である『やまと新聞』では、1902～1906年に奉公人口入^{くちいれ}⁴⁾所の広告は散見されるが、この時期における白人家庭の奉公人自体についての記事はほとんどみられない。『やまと新聞』は1906年11月3日に『日布時事』と改題されたが、まず1908年3月31日に「市内小人数の白人家庭にて善良なる日本人の夫婦者を求む、男はハウスウオークと庭掃除をなし、女はコックをなすべし。適当の者には好き給料を払ふべし。望みの者は至急本社へ来談すべし（句読点筆者、以下同じ）」という広告がみられた。また1907年には日米紳士協約が成立し、日本人移民は便船ごとにわずか20人程度の呼寄せ渡航者のみに減ってしまった。その結果、1909年9月8日の記事では白人家庭の奉公人は減少するようになり、日本人移民が以前では1週1ドル～1ドル50セントの薄給でも喜んで奉公に出かけたが、近頃は奉公人の方から頭を下げて行く者はなく、自然と給料も上がって家庭奉公に無経験の者までが1週3ドル～4ドルの給料を請求するよう

になったとある。

当時に発刊された『布哇実業案内』（1909 年）の「布哇在留日本人名鑑」によれば、ホノルルで奉公人の口入所を営業する者が 5 名挙げられている⁵⁾。また『最新正確布哇渡航案内』（1904 年、以後『布哇渡航案内』）には、ホノルルで職業を求める方法の一つとして、日本人は口入所に行って依頼すると記されている。しかし、これには「ハワイに永く居る人が周旋料を取って営業しているので、ただ周旋料を取るのが主眼のため不親切を免れない。また、世話焼きが周旋する仕事の口は概して面白くない。だから教会または寺院に依頼して仕事を求めるのが普通である⁶⁾」とあり、口入所の評判はよくなかったようである。また同書には、当時の日本人の職業全般について述べられており、「ホノルルについてはさとうきび耕地がないので、日本人のうち独立で営業する者の他は商店や事務所の勤めより、一番多いのは白人方の奉公で、ほとんどの白人は日本人、中国人、その他各国人の奉公人を 1 人多い場合は 4～5 人も置いている。現在日本人の奉公人は千人もいるでしょう⁷⁾」とある。

本稿では白人家庭における仕事の種類とその内容、それぞれの給料について明らかにし、白人家庭労働者の多い地域と白人居住地域との関係について考察する。そして、各種統計や人名録からみられる従業者数を明らかにする。さらに、1910 年代以後の『日布時事』における「白人家庭」の記事を検索し、求人広告の内容や特集記事から各時代における問題点や傾向などについて検討する。

Ⅱ 仕事の種類・内容・給料、就業者の多い地域

1 仕事の種類とその内容

(1) コック

耕地労働者が都市に出て、新しい職を得ようとしていた日本人移民の多くが、白人家庭でコックの仕事に就いたことについて、前山隆『ハワイの辛抱人』に次のような興味深い記述がみられる。

【資料 1】⁸⁾

日本移民が耕地労働者をやめて都市に出てきた場合、かれらが職業構造のなかで得られる場というものは大へん狭いものであった。白人家庭での「奉公」というのがその代表であった。コック学校校則の第 1 条に「親愛律儀を旨として」とあるが、この律儀は奉公人が社会の支配層を形成した白人の「信用」を得るための最大の要件であったにちがいないし、また奉公人の倫理の根幹でもあった。当時日本移民間には、「白人コック」という言葉があり、これは「白人家庭に奉公する日本人コック」を意味したが、これは単純な「家庭奉公」「家庭労働」という概念から区別される傾向にあった。家庭内の雑用一切をやる者と特定の職域のみを果たすために採用された者の区別を強調しているのであろうが、現実には多くの場合「白人コック」も料理に関係のない雑用をやらされていた。

文中の「コック学校」というのは、元年者⁹⁾の石村市五郎が 1896 年に始めた料理学校である。

千人以上の卒業生はおもに奉公人となり、レストランなどの経営者になる者もいたであろうと、同書に書かれている。先述の1904年『布哇渡航案内』にも料理学校の紹介があり、石村のкок学校については生徒が50～60人、卒業後に市中の白人に奉公する者が300人以上で、ホノルルの料理人はこの学校から出たものばかり¹⁰⁾とある。また、奉公人の仕事の種類については項目を立てて説明され、料理人（кок）については、素人ではできないが、少し稽古をすれば覚えられること、通例これは男の仕事であるが、なかには女もいる¹¹⁾とある。

(2) 男性の仕事

『布哇渡航案内』には、料理人以外に次のような仕事が挙げられている。給仕（ウエイター）はкокの手伝いで、調理したものを主人に出す。園丁（ガーデンボーイ）は素人でもできる仕事で、庭園の掃除や灌水などをする。その他、馭者（ドライバ^{みずあて}ー）すなわち馬車使いや、厩男（ステーブルボーイ）という厩の掃除をする仕事もある。また、男の仕事で学僕（スクールボーイ）があり、これは仕事をしながら学問をしたいと思う人が就く。彼らは午前5～6時から起きて庭園の掃除や夫人の食事の手伝いなどをして、8時頃から昼の弁当をもらい学校に出かける。午前9時から午後2時まで、学校ではすべて英語が使われる。そして、放課後に主人の家に帰ると彼らは朝と同様の仕事をして、夕食後に食器を洗って午後7～8時頃に自宅へ帰宅する。この学僕を置くのは低所得で、1人前の奉公人を雇えない家庭である¹²⁾。

1912年の『日布時事』では、日本人の従事するおもな職業について「ホノルル同胞の職業状態」というタイトルの記事がシリーズで掲載された。6月7日の第14回目に「白人家庭労働」が紹介されており、男子はヤードボーイ（おもに芝刈りなど戸外の雑用をする使用人）とステーブルボーイ、なかにはバギー¹³⁾のドライバ^{みずあて}ーも兼ねる者があると書かれている。

(3) 女性の仕事

『布哇渡航案内』には、「女の仕事として子守があり、家によっては子守のみでなく、普通は家内の掃除などもする¹⁴⁾」とある。先述の「ホノルル同胞の職業状態」では、「同胞の婦人がほとんどウエイター、ハウスウオーク（掃除などの家事）、洗濯の3種を1人でなす」としている。

女性の仕事内容については、日布時事社から発行された『布哇家庭雑誌』（1914年11月）の「白人家庭に於る婦人奉公人の状態」という記事で詳細に述べられている。その一部を次に紹介したい。

【資料2】¹⁵⁾

当時、奉公と云われた白人家庭労働に従事する者は3,500名で、そのうち婦人は約3分の1ほどで1,000名内外である。仕事の内容はкок、ウエター、ハウスウオーク、子守、洗濯などで、これ等の仕事のいずれか1種をする者もいるが、たいていは2種の仕事を兼ねている。

ウエターとハウスウオークを兼ねた者の場合、毎朝6時頃に仕度して仕事先に行く。そして朝飯のテーブルを作って食器などの用意をし、主人がテーブルに着くのを待って給仕をする。食事が終われば、すぐに食器などをキッチンに下げ、それが済んだ後、自分の朝食をとる。そのうち主人は仕事、主婦は買い物に出るなどして、それからハウスウオークの仕事に取り掛かり、家の掃除をする。まず主人夫婦のベッドルームを掃きベッドメイクをする。次にパーラー（応接間）の掃除をはじめすべての部屋の掃除を済ます。これが終わるのが11時頃で、すぐに昼のテー

ブルの仕度を始める。12時前に主人が帰宅してテーブルに着けば、朝食と同様の仕事をして、その後自分達の食事をする。

午後は奉公人の多い家なら少し時間があるので、この暇を利用して洗濯や縫物をするなど多少は自分の用事が出来る。しかしどの家庭でも時間をくれるという訳でなく、奉公人に少しの休みも与えぬところもある。そういう家に限って奉公人は永続きしない。

午後の仕事が済むと夕食の支度に取り掛かる。たいていの家では朝昼は簡単な食事で済まし、夕食に御馳走をする。それで給仕する者は昼に着た着物を脱ぎ、派手な模様の浴衣などのきちんとしたのを着て給仕をする。すべての白人家庭では婦人の奉公人が日本着を着用することを好み、なかには西洋衣の着用を絶対に禁ずる家もある

以上のように、ウエイターとハウスウオークの仕事の段取りや服装に関して、具体的に言及されているのは興味深い。『日布時事』の1913年1月1日「ホ府日本人職業生活状態」や同紙1916年1月1日「在留同胞の社会状態」にも、白人家庭労働者の種類とその具体的な仕事内容などが記述されている。ほぼ同じ内容であるが、後者では、とくに男子では白服、婦人では小綺麗にして爪の垢など決してないよう細心の注意を払う必要が記されている。そして、主人に気に入られ、10数年も奉公している者は少なくなく、綺麗で几帳面でかつ真面目で貯蓄のできるのは白人家庭奉公であることが強調されている。

2. 家庭労働の給料

『布哇渡航案内』(1904年)には、仕事の給料についても述べられている。まずコックが奉公人のなかで一番高く、1週間払いで4ドルから7～8ドル、なかには10ドルも得る者もいる。女性の場合には、給料が男性より少し安価で、ウエイターはコックより低賃金となる。ガーデンボーイの給料が一番安い週2～4ドルで、ドライバーやステーブルボーイはそれより少し高い。女性の子守や洗濯は、週2ドル50セントから5ドルである。通常、男女とも奉公人は食事付きで、なかには住む住宅を貸す場合がある。夫婦者が同じ住宅に住み込み、1カ月食事付きで30ドル、あるいはそれ以上の給金を得ることもある¹⁶⁾。

1912年の「ホノルル同胞の職業状態」では、各種の給料が次のように示されている。多くは1週間勘定で、ヤードボーイは4ドル50セントから5ドル50セント、ハウスウオークその他は5ドルから6ドル、コックは6ドルから7ドルとしている。夫婦者では男性がコック、女性がハウスウオークとして働いて11ドルを受け取っている。その他、自動車のドライバーはおよそ1カ月40ドルの給料を受け取っている。そして、他の職業に比べて白人家庭労働は収入も割に良く、他の職業とは違って食費と部屋代は主人が負担し、支出は雑費のみなので、比較的的成功者が多いと書かれている。

以上のように、先の『布哇渡航案内』と日布時事の記事とを比べると、全体的に給料は少し高くなっており、新たに自動車運転手が登場している。また『布哇家庭雑誌』によれば女性のコック専門はほとんどいないが、コックとハウスウオークを兼ねるのが少しあり、その給金は比較的好くて、5ドルないし6ドルである¹⁷⁾。

3. 従業者の多い地域

前述の「ホノルル同胞の職業状態」第14回の記事には、冒頭に「市外カイクキ、カリヒ、マノアおよびマキキ方面、その他市内に於ける同胞にて白人家庭に労働する者は男女を合せて2000人以上なり」とあり、これらの仕事に就く日本人の多い地域として、4つの地域が挙げられている。このうちマノア、マキキとカイクキは特に白人の多く住む地域であった¹⁸⁾。

『ホノルル繁昌記』（1911年）の「マノア地方に於る日本人」の項は、次のように記されている。

【資料3】¹⁹⁾

マノア地方は気候清涼にして、且つ見晴しのよき地なるを以て近年白人の此地方に住居する者多し。現在白人の住宅が何軒あるか面白半分に調べて見るとちょうど100軒ある。之等白人の家内労働に従事する同胞を調べて見ると男120人、女80人。合計200名。それから200の同胞が1ヶ月に白人より貰受の給金が4000弗で、1人平均18弗^(ママ)に当って居る。其外、野菜屋、養豚等の独立業者が約100名、全体で300名の同胞在住者がある。

また *Manoa: The Story of the Valley* には、マノアに最初にやってきた最初の日本人はおそらく世紀転換期の頃であり、一世夫婦がマノアに来て、カレッジヒル地域の新しいハオレ（白人）居住地の家庭奉公人として働いたことや、プランテーションを離れると男性は雑役夫や庭師となる一方、彼らの妻は料理人、子守や洗濯人として仕えた²⁰⁾ことが記されている。

『ホノルル繁昌記』の「マキキ地方に於る日本人」の箇所では、「マキキ地方はホノルル市内に於て最も白人の住宅多き地にして従って同胞の之等白人の家内労働に従事するもの又最も多く其数数千人に上る²¹⁾」という記述がある。さらに『日布時事』の1915年4月18日に、「日布時事地方版・市内マキキ方面」という特集記事が掲載された。「マキキ地方の同胞と白人」の項目では、その関係が良好であることが次のように述べられている。

【資料4】

マキキ地方の同胞が他の地方と異なっている一番の特色は、其白人との関係の殊に密接なる事である。（中略）白人の住宅区域として発達すると共に、白人の家庭に働く同胞の奉公人が段々此区域内に多くの部落を作る事となり、従って其需要に応ずる為いわゆる館府（キャンプ）の数の多い事も他の地方に比べて第一となったのである。今日では此マキキ地方一帯の地に於ける日本人の男女奉公人は1,000名程に達し、各々其腕前に依って1週3弗50仙より多きは12弗も取る者もある。

（中略）一般に白人は日本人の奉公人を厚遇し、在留独逸（ドイツ）人の家庭の如きも今回の日独開戦にも拘わらず、其多くは主従の間柄依然として旧に変わらず、益々円滑であると云う美談さえある。

（中略）幸いにして今日までは白人方に働く日本人の評判は頗る好く、日本人は一般に正直にして人情に篤く、且清潔であると云う評であったが、今後も永久に此好評を騙さない事を希望するのである（以下略）。

そして、マキキ地方における同胞の職業状況は白人家庭労働者 1,000 名の他に 1,000 名、合計 2,000 名が居住し、家庭労働者が中心となって商店その他の営業も奉公人に依存して生活しているとある。やや誇張気味ではあるが、この地方に白人家庭労働者が集中して日本人町を形成していることが語られている。

このような住環境をめぐる白人との良好な関係が、ホノルルにおける日本人社会の進出を促したともいえよう。また 1922 年の同紙「地方訪問記」でも、日本人の集住地とみなされる館府(キャンプ)のうち、この地域にあるマキキ新キャンプや木割場キャンプなどにおける日本人の職業は、おもに白人家庭奉公であると紹介されている²²⁾。

Ⅲ U.S.Census などの統計や人名録にみられる従事者数

統計でみられる最初の白人家庭労働は、管見では 1907 年 2 月発行の布哇新報社編『布哇年鑑²³⁾』である。これによると、日本人の独立営業者 10,259 人のうち家庭雇人 388 人は 3 位(1 位: 小農 817 人, 2 位: 店員雇人 593 人)であり、これはハワイ全体の人数と考えられる。次に、同じ布哇新報社編『布哇日本人年鑑(第 8 回)』(1910 年)に収録されている「日本人々銘録」により、ホノルルにおける白人と名の付く職業の種別、および居住地・出身県別の人数は表 1 のようになる。

表 1 ホノルル日本人の「白人」関係従事者の内訳(計 152 名)

職業名	人数	居住地	人数	出身県	人数
白人雇	82	ワイキキ	29	山口	57
白人コック(コック白人家庭)	48	パラマ	13	広島	31
白人奉公	10	ヌアヌ	12	福岡	20
白人ウエダ(ウエイター)	5	リリハ	11	熊本	15
白人家庭保母	3	カリヒ	8	沖縄	6
白人内洗濯(機関師)	2	マキキ	6	新潟	4
白人ハウスウオーク	1	ブナホー	4	岡山	4
白人医院	1	その他	69	その他	15

布哇新報社『布哇日本人年鑑(第 8 回)』(1910 年)の「在布哇日本人々銘録」より筆者作成

現時点で、白人雇と白人奉公との区別は認識できないが、当時は何らかの違いがあったのかも知れない。保母は、子守のことであろう。また、名前から女性と判別できるのは保母の 3 名(いずれも福岡県出身)、コック、ウエダ(ウエイター)と奉公の各 1 名からなる計 6 名で、これで見限り当時では多くない。うち夫婦者と思われるのは保母とコックの各 1 名で、夫はいずれもコックである。居住地ではワイキキが最も多く²⁴⁾、マキキとマノアはこの当時多くない。出身県では山口が目立つが、その理由は明らかではない。

次に、U.S.Census(米国国勢調査)によるホノルル日系人の従業者数をみてみよう(表 2)。1910～30 年のデータは、Domestic and personal service: Servants(家庭・個人雇用: 使用人)、1940 年は Domestic service workers(家庭雇用労働者)の人数である。

ホノルルにおける日本人の白人家庭労働（飯田）

表2 国勢調査にみるホノルルにおける家庭雇用使用人（労働者）数

米国 国勢調査	年度	男性		女性		日本人計
		全体	日本人	全体	日本人	
第13次	1910	1,630	969	849	610	1,579
第14次	1920	1,175	1,053	1,121	881	1,934
第15次	1930	1,286	653	2,030	1,401	2,054
第16次	1940	1,090	654	3,445	2,714	3,368

（単位：人）

詳細は飯田耕二郎『ホノルル日系人の歴史地理』（ナカニシヤ出版、2013年）の11・13・15・16頁を参照

表中の全体は他のエスニックを含めた合計人数で、とくに女性の場合、この職種で日本人がほとんどを占めていることが分かる。また1910年と20年では、家庭雇用使用人の数は男女とも他の日本人の職業に比べ1位であり、30年では女性の職業で1位となり、著しい増加傾向を示す。男性のこの数は大工、店員と小売商に次ぐ4位になり、明らかに減少傾向にある。1940年における女性での同業の増加はさらに顕著で、10年間で倍近くになっている。

ちなみに、『海外各地在留本邦人職業人口表』などにみるホノルルにおける日本人職業のうち、家事被雇人（1908年のみ家内労働者内外国人被雇人）は、1908年：1,478人（男性1,017・女性461）、1919年：2,532人（男性1,450・女性1,082）、1929年：1,936人（男性1,008・女性928）、1936年：3,146人（男性1,600・女性1,546）²⁵⁾で、他の職業と比べていずれも1位である。1919年の人数は上記の1920年の人数とかなり違いがみられるものの、1908年や29年・36年の場合では近時の年度と大きな差異はみられない。

Ⅳ 1910年代～40年代の新聞記事にみる労働者の様相

1 1910年代の求人広告

ここからは、ハワイの日本語新聞『日布時事』の1910年から42年の廃刊までの記事に即して、時期的な労働者の様相をみていこう。この期間の記事を10年毎に「白人家庭」というキーワードで検索すると、10年代が最も多い。当期では、さかんに白人家庭への就職活動が行われていた証左であろう。

最初に広告記事からみると、口入屋の広告記事が4種あり、いずれも1911年から1913年までのもので、そのうちの3種には場所と名前が記されている。すなわち①マキキ木割場 石橋口入屋 主任藤本瀧蔵 ②奉公人周旋所 南キング街1502 堀田館府（キャンプ）内 ③フォート街クワイ近く オアフ染物所 同奉公人周旋部 主任 青山文記 とある。このうち①と②はマキキ地方、③はダウタウンに存在する。周旋の手数料について「無」とあるのが1件、「仕事を知らせてくださる方へのお礼として口銭の4分を差し上げます」というのが1件みられる。

次に1910年代の求人広告について、求人对象別に整理したのが表3である。

表 3 白人家庭労働の求人広告記事の内容（1910 年代）

求人対象	年・月	求人内容：①仕事の種類 ②仕事先（場所） ③申込先 ④給料などその他の条件
①コック	11・3	①上等コック ②某白人家庭 ③ケアモク街 1646 号
	16・7	①上等コック ②白人家庭 ③日布時事社 ④数年間の白人家庭でのコック経験者
	17・9	①男または女のコック ②家内 2 人の白人家庭 ③ベレタニア街 757 番 ④邸内に雇人住家有
②夫婦者	10・4	①男はコック、女はハウスウオーク ②白人家庭 ③本社（日布時事） ④1 週間 11 ドル
	10・8～9	①女は上等コック、男はヤードボーイ ②家内 3 人の某白人家庭 ③本社（日布時事） ④月 40 ドル
	19・7	①男はヤード、女はハウスウオーク ②ワイキキ白人家庭 ③本社（日布時事） ④1 週間 10 ドル
③婦人	12・7～8	①コック ②家内 2 人の某白人家庭 ③月 20 ドル
	13・9	①子守 ②カймキ某白人家庭 ③来社（日布時事） ④年齢 30 歳以上
	17・5	①掃除するだけ ②カймキ白人家庭 ③フォート街モデル洋服店内野村 ④月 6 ドル
④スクールボーイ	13・3	②某白人家庭 ③パラマ・セツルメント内のボーエン氏

『日布時事』の記事より筆者作成

この頃から婦人もしくは夫婦者、職種ではコックの需要が多く、コック以外の男性のみの求人はみられないことがわかる。また新聞広告のためか、日布時事社が周旋の労を担っている点が興味深い。

白人家庭労働者の求人が増えるに従って労働者の数も増え、この頃すでに団体がいくつか組織されていた。次のような記事に、団体の存在を知ることができる。まず 1910 年 10 月 29 日には、マキキ地方の白人家庭に奉公している同胞者によって「マキキ青年会」なる団体が組織され、その事務所がヤング街に設けられた。この団体がマキキ木割場館府（キャンプ）において素人芝居の興行を打とうとしたが、山崎なる者との間で紛擾が起こったという。また 1911 年 1 月 6 日には木村吾一を会長とし、当市の白人家庭やホテルなどに働く青年 150 名を会員とする「青年共励会」は、昨夜にヌアヌ街の一新楼において新年宴会を催したとある。この会は、1909 年 4 月 16 日に組織したという広告記事を掲載している。また、同年 5 月より翌 10 年 6 月までの 1 年余の間「本会事務所を左の所に設け会員相互の利益の増進と職業の周旋に従事す ヌアヌとパウアヒ街角 布哇日本人青年共励会」という広告も出されている。この場所はダウタウンであるが、これらの団体に限らず、同じ頃には白人の多く住む地域には同様の組織があったと推察される。

2. 賭博・喧嘩・密造酒などの事件（1910 年代～ 20 年代）

白人家庭労働者をめぐる問題として、「落葉籠」というコラム（投書欄）にいくつかの苦情が寄せられている。①は夜に騒いでいるのに対して、②は賭博で拘引された件である。具体的な記事の内容は、以下の通りである。

【資料 5】

- ① 小生はマノアに住むものに御座候。当地方に数名の独身者の女が白人家庭奉公致し居り候。毎晩毎晩下町より数名の青年が遊びに来たり。9時を過ぎても尚ほキャッキヤツと騒ぎ、主人に怒鳴られるもの有之候。甚だ同胞の体面上よからねば貴紙にて筆誅を乞ふ。（1913 年 3 月 27 日）
- ② 土曜晩マキキ、カフマヌ、スクール近所で同胞奉公人が賭博中探偵に踏み込まれ拘引された（中略）まあまあ白人家庭奉公して犯罪で拘引されると云うのはあまりみっともよきものではない。（1913 年 4 月 9 日）

賭博に関しては、同じ頃の 1913 年 1 月 22 日に「マキキ地方の白人家庭に奉公する中国人のクックやウエイターは毎夜の如くベレタニア街産婦院裏手に集まり賭博を行い、付近に住する白人どもがしばしば警察に届けている」などと、日本人以外の奉公人についても報じられている。また奉公人同士の仕事上での^{いさか}諍いもあり、次のような記事がみられる。

【資料 6】

奉公人同士の喧嘩 渡辺某は白人家庭クックとして先頃までシャフター兵舎某士官の家に勤めていたが、片原某の中傷のため追い出されることになり、片原は渡辺が出た後へ自らクックとして働いていたが、一昨日ベレタニア街で二人はぱったり出くわして殴り合いを始め、ついに渡辺は拘引されて罰金を科せられることになった（1914 年 2 月 9 日）。

1920 年頃のアメリカ合衆国では禁酒法が実施されており、それと関連して白人家庭労働者による密造酒事件に関する 2 件の記事がみられた。まず「主人の不在中に白人家庭で密醸」と題する記事（1920 年 11 月 20 日）は、主人一家の留守を幸いに 8 カ月以前より焼酎製造を行い、各方面へ密売した藤本某が酒密造販売禁酒法違反により一昨日にて検挙されたというものである。もう 1 件の「密造酒哀話」（1921 年 8 月 2 日）は、妻子とともにカIMUM 電車止り付近に住居していたある男性は白人家庭の日雇人、その妻は洗濯人として暮らしていたが、しきりに妻子が帰国したがるので彼はハワイを引揚げ郷里に帰った。しかし、再び 1 人でハワイに向った彼は、密醸を行ない、飲酒ばかりで「白痴」となり、わずか 2 カ月余にして再び故国に送られたという。

3 給料に関する問題（1910 年代）

労働者の給料に関して、いくつかの大きな記事が掲載されている。まず「山上の人」と称する白人家庭奉公人の投書記事（1916 年 11 月 19 日）は、次のように増給を要望する内容である。

【資料 7】

一般に白人家庭といっても一様ではなく、米国人系と英国人系とドイツ人系それぞれ特別の気風があり、また同じ米国人でも人により境遇によりさまざまで、全く同一である家庭は決してない。家族同様に待遇する情け深い主人もあるが、多くは奉公人を一種の道具のように心得て、

出来る限り少ない給料でなるべく多くの労働を強いるのが一般の家庭の有様である。白人家庭の主人が奉公人に対して同情がない一例として、近頃種々の物価騰貴等につれ一般の給料は増給になっているが、家庭奉公人の給料を主人より先きに上げることはほとんど稀で、必ず多少の悶着の後でないと増給しないのが従来よりの習慣である。奉公人も好んで他に転ずるものは決して無い。この際、奉公人として主人に望むところは、奉公人の境遇を考え、同情をもって待遇してほしい。

そして第一次大戦後の不況の頃、「口入屋の繁昌は何事を語る 白人家庭に於ける切詰めた生活」と題する記事（1918年5月17日）では、口入屋から聞いた話として家庭奉公人の仕事は以前に比べて少なくなり、給金も平均1週間1ドル位の値下げとなったという。各島耕地よりホノルルに出て奉公口を求める者は仕事を選ばず、安賃金に甘んじて仕事に就いている。しかし鳳梨（パイナップル）生産の季節が来ると多数の労働者を要するので、その仕事が期待されるとしている。

さらに「日本人奉公人排斥」というタイトルで、英字紙を紹介する記事が1919年9月3日に掲載された。これは、マノアの白人家婦連が日本人奉公排斥の協議会を開こうとしているという以下の内容である。

【資料8】

今朝のアドバタイザーの報ずる所によれば、マノア谷に住宅を有し日本人奉公人を使用している白人家婦連は最近日本人奉公人が絶えず増給を要求し、かつ労働時間の短縮を要求するため、これに対応する策を講ずるため、近々家連を開いて相談するようである。家婦連の言う所によれば、一般家庭奉公人の給料は過去3ヶ年に10割の増加示したが、なお絶えず要求して止まないそうである。例えば、日雇いやードボーイの給料は3年前には1日1弗であったが、やがて25仙の増給となり、さらにまた25仙の値上がりとなり、今日では日給2弗となった。（中略）

さらに労働時間について言えば、1年以前には朝の7時、遅くて7時半には仕事に取掛かった日雇いやードボーイが今日では8時にならないと来ない。また午後にはキッチリ5時には仕事を止め、もし10分でも15分でも仕事が延びれば、オーバータイム賃を要求する。即ち8時間労働を少しでも越えるとオーバータイムを遠慮なく要求する。そこで主人側でもやりきれないというのが家婦連の言分で、このたび家婦連相談会を開いて日本人奉公人問題を議するそうである。

英字紙の報ずる所であるから、真偽の程は明らかでないが、この家婦連協議会では（1）出来るだけ日本人奉公人を使わぬようにする事、（2）日本人口入屋が奉公人の給料を定め、また奉公人および日雇労働者の手配をするが、今後はこれに従わない事。（3）日本人の増給要求には出来るだけ応じないようにする事、等について協議する予定だという。果たしてこの報道が事実であるならば、奉公人にとっては重大問題である。（中略）白人家庭の奉公は日本人で無くては勤まらない。日本人は従順で正直で、某国人のように物を盗んだ入りしない。主人が居なくても家の留守番をさせても過ちが起こらない、しかるにマノア家婦連が日本人奉公人排斥の相談をなすとは不法である。増給は単に耕地労働者の問題ではない。家庭奉公人の増給問題も重

大であると某奉公人は憤慨していた。

この紙面に対して、いくつかの記事がみられた。同日の「日布時事（社説）」では、とくに（2）の奉公人周旋業者について、慣れてきた奉公人を高給にして他へ誘導して、主人側の迷惑や不便を省みずに自分の利益を貪ろうとする人があるのは問題で、大いに戒めねばならないとしている。また翌9月4日の「寄書」には、奉公人排斥協議会がいくら成立しても無関係であり、労働者が不足しているので、奉公人を待っている白人はいくらでもいる、という署名記事がある。さらに同9月11日の「寄書」では、家庭労働者の増給要求は当然であり、すでに下町では早くより日給は2ドルであり、マノアは遅れている、と記されている。この頃に起こったオアフ島第2次大ストライキや排日問題の影響もあり、家庭労働者の増給問題が新聞紙上で議論となったことは注目される。

4 雇用の季節性（1920年代）

1910年代では「白人家庭」をキーワードに多くの記事がみられたが、1920年代になると一転し、10年間でわずか10件と少なくなる。おもな記事として、まず雇用の季節性に関するものが注目される。

鳳梨（パイナップル）製造の労働者については先に紹介した記事にもみられたが、1920年9月23日の「鳳梨罐詰製造で約10万弗が市内同胞労働者の懐ろに」と題した白人家庭労働との関係が述べられている。その要点を紹介すると、次のようである。

【資料9】

市内の日本人労働者といえは大概白人家庭奉公人か棧橋労働者か鉄道工夫に限られているようであったが、6カ月に亘る耕地労働者同盟罷工（ストライキ）の結果労働者の不足を来し、各会社争って賃金を値上げしたため今まで安い賃金で仕方なく辛抱していた各労働者が先を争って鳳梨会社に走るようになり、ここに都会の同胞労働界に一大動揺を来たした。同胞商店は店員がいなくなるので大閉口するし、白人家庭は庭園が荒れはているという有様である。

口入屋について見るに、周旋所が一番閑散になる時が鳳梨製造の始まる6,7月の頃で、一番忙しいのが鳳梨製造の終了した9,10月頃である、即ち今頃からそろそろ元職にありつこうとして各周旋所の入口に群をなしつつある。これを一面から見たら即ち5,6,7,8の約4カ月は同胞労働者が凡て西のイビリーを指して集まり、他の月は各白人家庭、棧橋、鉄道という風に散在する。9月頃を区切りとして同胞の市内労働者が1年に1回づつ大動揺しているのである。このため市内労働者が甚だ浮腰になり、以前のように辛抱人が少なく皆不真面目になりつつあるのは非常に悲しむべき現象である。

以上のように9月を境にして、それまで市内の西側にあるイビリーの鳳梨罐詰工場に労働者が集まり、それ以後は白人家庭などの労働に散在して働くという現象が起こる。そして、真面目に1カ所で働くという気風が失われていくのである。

この約1年後の1921年9月1日に、「好い仕事を求むる人の群れ・耕地労働者は不足と云ふ

に有余る白人家庭労働者・7,8月は奉公人の霜枯時」という記事が掲載された。これは、労働者不足といいながら、男性の家庭労働者は余っているという内容である。桂庵（奉公人周旋業者）の話として、女性は給料が安くよく働くから、白人家庭では好んで婦人を雇い入れるので奉公人社会からは男性の影が次第に薄くなっていることが記されている。さらに、近頃では耕地の労働を嫌って楽な仕事に就こうとホノルルに出て来るフィリピン人が増え、安価でヤードボーイやデイウオークへ流入している。そのため、日本人男子奉公人の社会に小さい恐慌が生じているという。不景気になって奉公人を減らしている白人家庭は多くあり、女性の給料は8～13ドルで、英語は不得意でも仕事の着実な女性はすぐに雇われる。男性はなかなか雇い手が少なく、「ブラブラしている」者が多い。市内の各桂庵のベンチには、朝から多数の男性が生気のない顔をして「好い仕事」を腰掛けて待っている。毎年決まったように、7,8月頃は奉公人社会の不景気期間で、休暇の終わる9月中頃から就業機会が発生するのである。

5 女性従業者の増加（1920年代～30年代）

前節でみたように、男性家庭労働者の需要が減少したのは、安い給料で働く女性労働者とフィリピン人労働者の増加によるものである。以後、この傾向は次第に強まるように思われる。それを裏付けるのが、しばらく経った1929年8月1日付の記事である。これは「虹のマノア溪(14)」と題する連載で、記者がマノアに住む古参の日本人住民にインタビューした内容である。

【資料10】

マー、何処もそうか知りませんが、マノアの白人家庭働きは、殆ど日本人娘で占めて居ります。ここ4,5年前からの変遷と云うものは頗る驚くべきですな。男子の仕事は段々婦人に蚕食せられて、残って居るはほんに少数に限られました。第一、ヤードボーイは調法な日雇人が居るので、それで済まし、コック、ハウスウオークは普通婦人の賃金より少し計り奮発して、婦人を使ふと云う風に、白人もなかなか考えて居ります。一寸風儀は紊れた節もありますが、今では主人の監督が嚴重で、悪い評判も立ちません。

このように、とくに日本人の若い女性が好まれたことが知れる。1930年代になると、「白人家庭」に関する記事が38件となり、とくに37年頃から増加している。まず30年代当初では不況を反映してか、1930年6月4日の記事は「白人家庭働きの求職者が多い—就職率は5割未満」と題し、市内各職業紹介所の調査結果が記されている。相変らずおもな労働先は白人家庭であるが、近頃の求人側では無経験者や英語のわからない者は拒絶され、就職口も昨年の3分の1に過ぎない様子で、求人側の条件が厳しくなってきたことが指摘されている。また同年10月31日の「白人家庭労働に永続させぬ人達—某紹介書所主の内幕談」では、失業難、就職難と世間では言われているが、白人家庭のコックや日本人料亭の料理人志願者はなくて困っていること、また特に若者が永続きしないこと、そして古参者が新参者をいじめるなど、奉公人同士の軋轢について述べられている。

先の表2でみられたように、1930年において女性の従業者数が男性のそれと比べて2倍以上になっている。その傾向を裏付けるように、30年代後半には「娘入用」の求人広告が11件もあ

り、とくに若い二世の女性が求められていたことが知れる。職種ではハウスウオークとコックが多く、なかには洗濯や子守もあり、「英語を良く話せること」という条件もみられる。場所はワイキキ、カイムキやヌアヌなど、やはり白人の多く住む地域である。

次に「キモノを着た婦人を歓迎する—白人家庭の新傾向」と題する1931年2月28日の記事を紹介しよう。

【資料11】

世間の不況に反比例して婦人の求職者は激増する一方だが、ホノルルに於ける一紹介所主の談によれば、1ヶ月に約30人位の婦人求職者が来るが、その中半分は若い女性で仕事口は相変わらず白人家庭の^{うち}コックやハウスウオークだ。近頃面白いことには日本着を着た婦人を歓迎し、求人の際特に俺の宅はキモノをきた女がほしいと要求してくる白人が多いそうだ。

これは、第2章で紹介した『布哇家庭雑誌』の内容を裏付けるものである。

6 太平洋戦争中（1940年代）

太平洋戦争中の1942年11月より、『日布時事』は『布哇タイムス』と改題された。したがって、これ以後のものは、『布哇タイムス』の記事となる。それまでの『日布時事』の記事を「白人家庭」で検索したところ、それは1940年に3件、41年に32件、日米戦争の開始後の42年に25件が数えられ、戦争前後で大きな変化はみられない。しかし『布哇タイムス』となつてのち、終戦時の45年までの3年間で同記事はわずか5件に減少している。そして、戦後の46年から49年までの4年間では計29件となり、やや増加している。

『日布時事』の時代では求人広告がほとんどで、「娘・婦人入用」の記事が多い。就労の場所が特定できるのはカハラ、マノア、プナホー、カイムキ、ワイキキやヌアヌなどで、やはり白人の多い地域となっている。『布哇タイムス』の42年から45年までの5件はいずれも求人広告で、同種のものが2件ずつあり、実質3件である。すべてが女性または夫婦者用で、内容は家庭仕事や料理で、住込みのうえ高給を与えるとある。場所が記されているのは、マキキ方面とタンタラス²⁶⁾の白人居住地である。戦後の1946年から49年までも求人広告が多く、ほとんどが夫婦者を求めており、男性はヤードボーイ、女性はコックまたはハウスウオーク、場所はワイキキ、カハラとダイヤモンドヘッドである。

V その後とまとめ

1980年に廃刊されるまで、『布哇タイムス』では白人家庭労働の求人広告は1950年代に増加したものの、1960年代になると減少し、1970年代にはみられない。また、1950年から「メイド」という言葉が新しく使われるようになった。やはり対象は婦人か夫婦者で、後者の場合には男性は仕事をしなくてよいというものもある。ほとんどが部屋付き（住込み）で、仕事はハウスウオークやコック、子守が多い。やはり勤務場所はカハラ、カイムキ、マキキハイツやダイヤモンドヘッドが顕著である。

以上のように、『日布時事』（1942 年以後は『布哇タイムス』）から「白人家庭」をキーワードにして、日本人のホノルルにおける家庭労働についての記事を分析すると、おもなものは求人広告であった。当初は男性のコックが多かったが、次第に婦人や夫婦者の求人が多くなった。国勢調査などでの従事者数が、その事実を裏付けている。とくに 1910 年代に求人が増加し、綺麗好きで真面目に働けば財産も蓄えられるようになり、白人との良好な関係がホノルルにおける日本人の進出を促す一因にもなったといえよう。しかし一方で、求人の増加は労働者同士のトラブルや増給問題なども引き起こした。白人の多く住む地域の周辺に、館府（キャンプ）と呼ばれる日本人の集住地が形成されたこと、キモノを着た婦人が白人家庭に好まれたこと、また第 1 次大戦中のドイツ人、太平洋戦争中のアメリカ人などのように、当時の世相にかかわらず、白人との主従関係が円滑で雇用が途絶えなかったことなどは大変興味深いのである。

注

- 1) 河原典史（2022）.「カナダ・バンクーバーにおける日本人移民の家内労働—20 世紀初頭におけるガーディナーの萌芽—」,『立命館言語文化研究』, 34 - 2, 1-17
- 2) 日布時事社（1935）.『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』, 67
- 3) 前掲 2), 宮本については 77, 倉田は 79, 野村は 81, 岩崎は 85, 佐伯は 93。
- 4) 周旋のことで、奉公人の周旋を職業とする者を桂庵（けいあん）とも呼んだ。
- 5) 林三郎（1909）.『布哇実業案内』, コナ反響社, 204. 布時事社, 1935 年。
- 6) 木村芳五郎, 井上胤文（1904）『最新正確布哇渡航案内』博文館, 70
- 7) 前掲 6), 67
- 8) 前山隆（1986）.『ハワイの辛抱人』, 御茶の水書房, 135-136
- 9) 1868（明治元）年に日本から最初に渡航したハワイのへの集団移民で、後に「元年者」と呼ばれた。石村市五郎は最年少（13 歳）であった。
- 10) 前掲 6), 72
- 11) 前掲 6), 67
- 12) 前掲 6), 67-69
- 13) 二輪または四輪の一頭立て軽装馬車。
- 14) 前掲 6), 68
- 15) 泉白洋（1914）.「白人家庭に於る婦人奉公人の状態」,『布哇家庭雑誌』, 1-7, 17-19
- 16) 前掲 6), 67-68
- 17) 前掲 14), 19-20
- 18) 1930 年の国勢調査では、これらの地区は何れも白人人口の割合が 40% 以上である。久武哲也（1999）.「ホノルル大都市圏におけるエスニック構成—プランテーションの遺産と制度的人種構成」, 成田孝三『大都市圏研究（上）—多様なアプローチ』, 大明堂, 367 の「1930 年におけるホノルルのエスニック集中地区」の地図による。
- 19) 武居熱血（1911）.『ホノルル繁昌記』, 本重眞壽堂, 2
- 20) Charles Bouslog, *Manoa: The Story of the Valley*, Mutual Publishing, 1994, 161p.
なおカレッジヒルは、ハワイ大学マノア校の西側にある地域。
- 21) 前掲 18), 2
- 22) 「マキキ地方雑観(三)」,『日布時事』1922 年 9 月 29 日
- 23) 外務省通商局編『移民調査報告（第 1 回）』（1908 年 12 月）21, 所収
- 24) 1930 年の国勢調査では、ワイキキも白人人口の割合が 40% 以上である。出所は前掲 17)

- 25) 1908 年は『海外各地在留本邦人職業別表』（明治 41 年 12 月末日現在）、1919 年は『海外各地在留本邦人職業別表』（大正 8 年 6 月末日現在調）、1929 年は『海外各地在留本邦人職業別人口表』（昭和 4 年 10 月 1 日現在調）、1936 年は『在留本邦人職業別人口表』（昭和 11 年 10 月 1 日現在）『日布時事布哇年鑑』（1939 年）による。
- 26) 1930 年の国勢調査では、タントラスも白人人口の割合が 40% 以上である。出所は注 17) に同じ。タントラスの丘はホノルルの町の北にあり、ホノルルの町や太平洋を一望する閑静な高級住宅地となっている。

